

# 華岡青洲による「瘍科神書」の成立と その各種写本に関する研究

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成28年10月22日／受理：平成29年4月12日

**要旨：**華岡青洲は理論と実際に必要な治療の間に較差があるために著書を出版しなかったが、「瘍科神書」は華岡青洲の著述の中で最も頻繁に書写された外科総論であった。この中で、彼の外科はカスバル流と諸流の長所を取り入れたものと主張した。彼は1804年に全身麻酔下での乳癌手術に成功後に華岡流の外科を主張したと考えられるから、「瘍科神書」の成立は1804年以前に遡らないと推察される。「瘍科神書」は50年以上も繰り返し書写されたため、書名と内容に大きな変容が認められ、異名同書は15種以上に及ぶ。1807年の「花岡青洲先生口授」は現在のところ最も古い写本であるが、これは「瘍科神書」の完成が1804年と1807年の間であることを示唆する。

**キーワード：**華岡青洲，瘍科神書，外科総論，異名同書

## はじめに

日本における江戸時代以前の医学史を通じて、華岡青洲（以下「青洲」と略）ほど海外にもその名が知られ、その事績に関する論考が多い医師はいないであろう<sup>1)</sup>。それは偏に青洲が20年近い歳月をかけて全身麻酔薬「麻沸散」の開発とその臨床応用に尽瘁し、日本の外科学史において、初めて乳癌腫瘍摘出を中心とする各種の選択的手術を可能にしたという先駆的業績によるものであり、1804年10月13日、紀州平山の春林軒における全身麻酔の施行は、術者名、患者名、手術名、手術日、手術場所が特定されており、正確な史料が遺されているという6条件を満たしている点で世界最初の試みであった<sup>2-5)</sup>。それに加えて彼の名を海内に知らしめるのは、「活物窮理」に代表される青洲の医の哲学が、当時の、そして今なお臨床医学を学ぶ者の心の琴線に触れるからであろう<sup>6)</sup>。

このように青洲に関する論考が極めて多数に上るにも拘わらず、彼の事績に関しては系譜に関する

ことも含めて、依然として不詳とされる事項も少なくない。その一つは青洲の著述に関することである。青洲は口述するのみで自ら著述を行わなかったし、口述が編集されて生前に板行されることもなかった。医療は医の古典に示された「知」の応用であり、「知」を目前の患者の治療にいかにか巧みに応用するかの「術」が肝要であると青洲は考えていた。紀伊藩の儒者仁井田好古の撰になる青洲の墓誌銘に、青洲が常々門人に語った言葉として「吾術は心に得て手に應ず。口は言うこと能わず、筆は書くこと能わず。能く視る者、之を領会するにあるのみ。」(原漢文)と刻されていることによっても、青洲は症例が一例毎に異なるものであり、治療に際しては、症例に応じて臨機応変に対処することが緊要であるとしたことが知られる。そのために「術」が重要であり、「術」を伝えることが出来ない著述の執筆と出版に消極的であったことが容易に理解できるであろう<sup>7,8)</sup>。

青洲が門人の教育に熱心であり、講義や病床で語ったことを彼らが書き留めたものが写本として伝えられ一門の内外に流布した。青洲がどのよう

な口述の様式を採ったのか、例えば門人を入門期間別に分けて口述したのか、どの主題を、どのような時間帯に、どれくらいの頻度で口述を行ったのか、どのような状況でそれらが筆録され、そして写本が作られたかも全く知られていない。また青洲が講義に使用したと考えられる肝心の草稿類も伝えられていない。いずれにせよ、出来上がった写本は門人の手によって次から次へと書写が繰り返されたが、書写が繰り返される毎に、誤字、脱字、文の脱落や付加が生じ、それは肝心の書名にまでも及んだ。写本は春林軒以外の医生によっても転写され流布した。このため同じ書名で内容が異なる写本、異なった書名で内容が同じ写本が出現するという混乱が生ずるに至った。このような紛乱した状況であるため、青洲の著述に関しては、これまで本格的な研究が行われていなかった。例えば、呉 秀三は「華岡青洲先生及其外科」の第三巻「青洲先生ノ著述」において50頁を費やして青洲の著述を論じているが、著述自体に関してはわずか7頁の記述のみで、しかもその過半を後述する佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」の紹介に充てている。残りの43頁はいわゆる図譜の「奇患図」類についての解説に終始しているだけで、青洲の医学を伝える主要な著述とそれらの有する意義についてはほとんど言及していない<sup>9)</sup>。

本稿では、青洲の著述を改めて整理し、その中で最も基本的な書と考えられる「瘍科神書」(以下「金創要術」など一群の異名同書の写本の代表としてこの書名を使用する)について、従来全く言及されてこなかったその成立年、その内容、そして流布に関して考察を加えたい。

## 1. 江戸時代の資料に現れた華岡青洲の著述

青洲の著述全般に言及した最も古い資料は青洲が没した翌年の1836年12月に仁井田好古が撰述した「華岡青洲墓誌銘」である<sup>10)</sup>。墓誌銘は青洲の事績を要領よく叙しており、著述に関しては「著す所、瘍科瑣言、産科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨明、乳岩辨、天刑秘録、傷寒講義等、凡そ二十七種。皆、其の治術の大意を言う。」(原漢文)とある。このことは甚だ重要な記述で、当時、華岡

家では青洲の主要な著述が27種であると認識していたことを示唆する。これによって「瘍科瑣言」以下7種の著述が明らかであるが、27種の著述の内、他の20種については何ら記す所がない。ここに示された7種の著述についても、記述の順序がどのような基準に従ったのか、つまり当時、墓誌銘を書くに際して華岡家から仁井田に提供された資料に記された著述の順序なのか、著述が完成した順序なのか、それとも仁井田自身が重要と考えた順序なのか分からない。もちろん書名の「いろは」順でもない。また7種の中にいわゆる「奇患図」に代表される図譜が含まれていないことも注目される。

次に古い資料は1852年の浅田宗伯の「皇国名医伝」である<sup>11)</sup>。これには青洲の伝が簡潔に述べられているが、青洲の著述として、瘍科鎖言、産科鎖言、治痢鎖言、瘍科方箋、瘍科神書、疔瘡辨明、乳巖辨、天刑秘録、青囊秘録、膏方便覧、丸散録、傷寒講義、青洲雑話の13種が列記されている。浅田の文章は仁井田の「華岡青洲墓誌銘」<sup>10)</sup>を下敷にして書かれたことは間違いない<sup>12)</sup>。つまり上述した仁井田の示した7種の著述に浅田が6種を追加したものである。このことは浅田の示した著述の順序が「華岡青洲墓誌銘」<sup>10)</sup>に披見される著述、瘍科瑣言、産科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨明、乳岩辨、天刑秘録、傷寒講義の順序と同一であることから類推される。つまり浅田は仁井田が示した上記7種の著述(書名中の「瑣言」を「鎖言」に変えている)の間に、当時流布していた6種の著述を適宜挿入して、合計13種にしたと推察される。「治痢鎖言」は一般に「痢疾鎖言」、そして「疔瘡辨明」は「疔瘡辨明(名)」として知られているが、浅田が閲覧した写本がそのような題名であったかも判らないので、必ずしも誤りとは言えない。しかし、「補訂版国書総目録」の当該箇所にはそれらの書名は披見されない。

いずれにせよ、1852年頃には浅田が示した13種の著述が青洲の手になるものとして流布していたことが知られるが、仁井田にせよ、浅田にせよ、青洲の門人ではない。いわば第三者である。したがって、彼らが記した青洲の著述の順序は、必ず

しも門人から見た著述の重要度を反映したものと見做すことはできない。以上の外に、青洲の著述に関する江戸期の資料としては、佐藤持敬（敬齋、1859年春林軒入門）の「華岡氏遺書目録」と本間玄調の「春林軒二十一種」があるが、それらについては次節、次々節において詳細に述べる。

## 2. 門人佐藤持敬による 「華岡氏遺書目録」の作成

青洲存命中も書写の繰り返しによる著述の混乱が見られたと推察されるが、そのことを伝える青洲在世中の史料は現在のところ知られていない。この問題はすでに潜在していたが、青洲存命中には顕在化することはなかったのであろう。しかし青洲が没して四半世紀も経つと、混乱は表面化して放置しておくことが出来ないほど深刻になり、門人たちの間でも学習に支障をきたすようになった。そこで越後・長岡藩の佐藤持敬は春林軒に所蔵されていた青洲の著述類を整理して目録を作り、門人の修学に便を図ろうと考えた。こうして1861年に完成したのが「華岡氏遺書目録」である<sup>13)</sup>。この「遺書」は後世に残した書という意味である。佐藤はこの間の事情を「序」において次のように述べている。

唯、坊間伝える所の書、多くは口授筆記に出るを恨む。故に、同名にして異書有り、異名にして同書有り。或いは重複錯乱。之に加えるに、伝写の久しき、誤謬百出す。解を得べからざる者有るに至るは、実に嘆くべき哉。余、深く之を憂う。一に校正せんと欲す。然るに小生の微力、豈、一朝一夕に能く為すべきか。今、暫く先輩に問い、書名目次を校正すること左の如し。当今、白面の書生、華岡氏何等の著書有るを知る者尠し。後進の者、此に因りて其の書を索せ。則ち未だ必ずしも小補なしとせずと言う。（原漢文）<sup>14)</sup>

長い間、書写が繰り返されてきたので、写本間に同名異書、異名同書という混乱が生じて、門人たちの学習に深刻な事態が生じた。この状態を改

善しようと佐藤が「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>を編んだのであるが、1850年代になると、門人たちの中にも青洲の著述を読まない者が増えたとし、青洲にどんな著述があるのかさえ知らない新入の門人がいるという深刻な状況に至った。「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>に「跋」を寄せた桑名の二川 純（昌賢、1858年春林軒入門）はその冒頭に「諸生、師に従いて医を善くせざる者は、修行の間、遺書を読むことの多からざると見聞することの多からざるに在り。多く見聞しても得る所なきは、遺書を読むことの多からざるに在り。」（原漢文）と述べて、門人たちが遺書を読まなくなったことに対して憂慮の念を吐露している<sup>15)</sup>。基礎的な知識がなければ、いかに実地に臨んでも学習の効果が挙がらないことを述べたのである。これらの門人は「華岡塾で学んだ。」という経歴を得ることだけを目的に入門したのであろう。このような状況は、青洲没後しばらくすると、春林軒における門人たちの勉学に対する意識、自己研鑽の意識が著しく緩んできたことを強く示唆する。ただ、ここで不思議に思われるのは、門人の学習の便のために佐藤が編んだ「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>であったが、この目録自体が門人たちによって書写され活用された形跡が認められないことである。頻繁に活用されたのであれば、必ずやその写本やその抄録が存するはずであるが、現在のところ知られている「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>は札幌市の華岡家に所蔵されている一本だけである。しかもこれが佐藤の手になる自筆本であるか否かも不明である<sup>16)</sup>。佐藤らの深憂にも拘わらず、幕末になると、門人の青洲の著述に対する関心が少しく失われていたことを示唆する。

佐藤持敬は「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>の中で計72種の著述を列記した。目録は呉によってその著書の中で複製されているが、この中の12種は呉が補充した。佐藤がどのような基準で著述の順序を決めたのかは判然としない。著述の配列を見る限り、専門科別、あるいは主題別に整然と分類されたとは言えない。佐藤の序に従えば、少なくとも勉強しようとする門人の便を図って編纂されたのであったから、医生にとって重要と思われる著述

を、読むべき順序に従って配列したと考えるのが妥当であろう。仁井田は「華岡青洲墓誌銘」<sup>10)</sup>の中で青洲の著述はおよそ27種としているから、以下に「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>の冒頭から27種の書名を列挙する。ただし呉による追加の書を除く。

瘍科神書、瘍科鎖言、産科鎖言、婦人拔萃、内科撮要方、瘍科方笈、丸散方、丸散方考、丸散便覧、膏方便覧、青囊秘録、禁方録、乳岩辨、疔瘡辨明、天刑秘録、脚氣翼方、痢疾瑣言、傷寒論講義、医談、燈火医談、青洲医談、鹿城医談、治験法談、痘疹要方、險症百問、險症百問答、舌診要訣

上記の中には「鹿城医談」のように必ずしも青洲の著述でない書も含まれている。しかし次節に示す本間玄調が編集した「春林軒二十一種」に収載されて重要と思われる「乳岩準附録」、「膏葉附録」、「統禁方録」の3書が上記の27種の中に含まれておらず、また「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>全体にも含まれていない。このことから、佐藤持敬による「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>の編纂も、彼自身が「則ち未だ小補なしとせず」と序に記したように、必ずしも十全ではないことを示している。逆に言えば、それほどまでに青洲の著述に混乱が生じていたということが出来よう。「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>の中で呉が書名の上に丸印を付して主要と考えたのは以下の19種の著述である。ここでも呉が補った書を除く。

瘍科神書、瘍科鎖言、産科鎖言、丸散便覧、膏方便覧、禁方録、乳岩辨、痢疾瑣言、傷寒論講義、燈火医談、青洲医談、鹿城医談、險症百問答、東郭医談、見聞録、整骨縋帶図訣、春林軒奇患図、合水堂奇患図、乳岩治験録

呉が何を基準に重要な著述と考えたかは分からないが、仁井田の7種の著述と呉の選択した19種の著述に共通するのは、瘍科神書、瘍科鎖言、産科鎖言、乳岩辨、傷寒論講義の5著のみ、そして浅田の「皇国名医伝」<sup>11)</sup>に示された13種の著述

と共通するのは、瘍科神書、瘍科鎖言、産科鎖言、乳岩辨、痢疾瑣言、傷寒論講義の6著である。浅田の言う「丸散録」、「青洲雑話」と呉の言う「丸散便覧」、「青洲医談」は同じ著書かもしれないが、ここでは除外して考える。いずれにせよ、佐藤持敬が「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>の中で「瘍科神書」を筆頭に挙げたことは、この著が門人たちにとって第一に読むべき華岡流外科の基本的、入門書の著述であると佐藤が考えていたことを示している。

### 3. 本間玄調による青洲の著述の整理と「春林軒二十一種」の編纂

書写の繰り返しに起因する青洲の著述の混乱を克服しようと努力したのは佐藤持敬が最初ではなかった。佐藤の「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>の編纂より11年前の1850年に、水戸の本間玄調（以下「玄調」と略）が青洲の著述の混乱を憂いて、それらを整理した。しかし玄調がこのような試みを行ったことはこれまで全く言及されることはなかった。例えば、呉は青洲の高弟14人を論じ、玄調については最も多くの頁を費やしてその業績を述べているが、玄調が青洲の著述の整理・編纂を行ったことに全く筆が及んでいない<sup>17)</sup>。呉以外の青洲研究者の論考もこの例に漏れない<sup>18)</sup>。

玄調は著書「瘍科秘録」<sup>19)</sup>、「統瘍科秘録」<sup>20)</sup>を著して華岡流の医術、華岡流の外科のさらなる発展と普及に努めたが、その一方で師青洲の著述が湮滅することを恐れた。そして「青洲の遺教」として後世に残すべき著述を21種15集に纏める作業を行った。編纂の業が終ったのは1850年の秋で、それが今日伝えられる「青洲華岡先生遺教春林軒二十一種」（以下「春林軒二十一種」と略）である<sup>21)</sup>。この間の事情は玄調の門人小林定誠が「春林軒二十一種」の初集に寄せた「序」に詳しい。

小林は「序」の冒頭で、玄調が青洲の門に学んで、その奥義を会得して華岡流の医術の普及に努め、自らも「瘍科秘録」<sup>19)</sup>を上梓してそれまで秘伝とされて諸家に伝えられてきた多くのことを公開したことに触れ、さらに青洲の誤りのない著述を普及することも正しい医療のためには必要であ

るが、その著述に混乱があって現状でのそれらの普及には厳しいものと指摘した。そして小林はその理由を以下のように説明している。

各国門人の手、複章、脱謬、巻に相い接す。先生（玄調のこと－松木注）異本を四方に募り、拮据校讎すること殆ど年有り。只、稍く緒に就く。出て余に示して曰く。先師（青洲のこと－松木注）の不肖の伝書なり。遺教の存するはただ是有るのみ。今や輯録して若干の巻を得る。題して曰く。春林軒廿一種集。汝、其れ之に序せよ。余、慄然として受け、之を読んで曰く。医門の書、未だ此の如くの覈実にして備具せるはあらず。読む者、誰が大声して激讃し之を悦ばざる。蕪穢の文、豈、人文頭に置かんや。唯、其の命の辞すべからず。序して以って先生に質すこと此の如く然り。（原漢文）<sup>22)</sup>

流布している青洲の著述の写本は「複章」、「脱謬」に満ちており、そのような状態では青洲の遺教として後世に伝えることは出来ないと考えた玄調は、青洲の諸著述の写本を収集して、それらを比較検討し、後世に伝えるべき代表作21種の著述を選定したというのである。なぜ「二十一」種であるのか不明であるが、玄調の脳裏に中国の上代から元代までの正史「二十一史」や勅撰和歌集の総称である「二十一代集」の「二十一」という数字があったのかもしれない。仁井田や浅田のような第三者ではなく、青洲の第一の高弟である玄調の選定になるものであるから、この編纂は十分に信拠のおけるものであることは言うまでもなく、その順序も医師の勉強にとって重要である著述、青洲の医学を伝える重要な著述を優先したことは間違いない。この編纂の業が終了した1850年には、青洲が1835年に没してからすでに15年経っていたが、青洲の著述の混乱は彼の死と同時に顕在化し始めていたともいえよう。このように青洲の著述を伝える写本に異同が著しいことの弊を唱えたのは玄調が最初であった。春林軒で「華岡氏遺書目録」<sup>13)</sup>を編集した佐藤持敬は、水戸におけるこのような玄調の試みを知らなかったよう

である。「春林軒二十一種」の詳細は以下の通りである。

初集	瘍科神書
二集	瘍科鎖言
三集	險証百問答、乳岳辨、乳岳準附録、天刑秘録、疔瘡辨名
四集	産科鎖言、痢疾鎖言
五集	青洲医談
六集	青洲医談
七集	撮要方、瘍科方箋
八集	膏葉便覧、膏葉附録、春林軒丸散方、丸散方考
九集	青囊秘録、脚氣翼方
十集	禁方録
十一集	禁方録
十二集	統禁方録
十三集	統禁方録
十四集	奇患録
十五集	奇患録

都合15集であるが、書名は21種を数える。このような経緯を考慮すれば、玄調が選んだ「春林軒二十一種」の稿本が青洲の医学を伝える最も正統な写本と考えられるが、この「春林軒二十一種」の写本もまた流布したので事情は簡単ではない。「春林軒二十一種」を含めて江戸時代の資料に現れた青洲の著述をまとめて比較したのが表1である。玄調も佐藤持敬も「瘍科神書」を筆頭に示している。この書が門人たちの最初に学ぶべき外科の入門書であると彼らが考えていたことを強く示唆する。

#### 4. 「瘍科神書」とその異名同書

大塚敬節、矢数道明編の「近世漢方医学書集成」の「華岡青洲」(一)には青洲の医術に関する代表的な著述が覆刻されているが、冒頭は「瘍科神書」の異名同書の「外科神書」である<sup>23)</sup>。その内題は「外科新書」である。「新」は「神」と同音であり、単純な書写時の誤りであろう。これは大塚敬節の所蔵本の中から状態の良い写本を選んで覆

表1 江戸時代の資料に現れた華岡青洲の著述

「華岡青洲 墓誌銘」 (1836)	「春林軒 二十一種」 (1850)	「皇国 名医伝」 (1852)	「華岡氏 遺書目録」 (1861)
瘍科瑣言	瘍科神書	瘍科鎖言	瘍科神書
産科瑣言	瘍科鎖言	産科鎖言	瘍科鎖言
瘍科神書	陰証百問答	治病鎖言	産科鎖言
疔瘡辨明	乳岩辨	瘍科方笈	婦人抜萃
乳岩辨	乳岩準附録	瘍科神書	内科撮要方
天刑秘録	天刑秘録	疔痘辨名	瘍科方笈
傷寒講義	疔瘡辨名	乳巖辨	丸散方
	産科鎖言	天刑秘録	丸散方考
	痢疾鎖言	青囊秘録	丸散便覧
	青洲医談	膏方便覧	膏方便覧
	撮要方	丸散録	青囊秘録
	瘍科方笈	傷寒講義	禁方録
	膏葉便覧	青洲雑話	禁方拾録
	膏葉附録		統禁方録
	春林軒丸散方		統々禁方録未完
	丸散方考		乳岩辨
	青囊秘録		乳岩辨証
	脚気翼方		疔瘡辨明
	禁方録		鎖陰治法記
	統禁方録		天刑秘録
	奇患録		脚気翼方
			痢疾瑣言
			傷寒論講義
			医談
			燈火医談
			青洲医談
			鹿城医談

刻したものであるが、なぜこの写本が選択されたのかは、解説を記した宗田も言及していない<sup>24)</sup>。というのは、覆刻の底本として使用したこの写本が甚だ不備であったことは、夥しい誤字に加えて、例えば縫合の図に関して、宗田が他の写本を参照して補っていることで理解される。しかし宗田が参考にした写本の詳細も不明であるので、宗田の行った補正が正しかったか否かの判断もつかない<sup>25)</sup>。この「外科神書」は栗山専庵が黒谷可部で1840年に書写した写本であるが、この栗山なる人物は「華岡青洲先生春林軒門人録」<sup>26)</sup>に披見されない。この門人録に見られる栗山姓の人物は、越前出身の栗山永助(1825年春林軒入門)と栗山寛蔵(1832年春林軒入門)の二人のみであるが<sup>27)</sup>、専庵が彼らとどのような関係にあるのか不詳である。彼らの入門年とこの写本の書写年の

間に8-15年の差が存することも、彼らが書写者の栗山ではないことを示唆する。写本自体は上述したように誤字が多く、図も稚拙で、決して覆刻に適した写本とは言えない。

宗田は「解説」において、青洲の著述を、「金創、瘍科、梅瘡他、治験録、図譜、整骨、産科、内科、眼科、製薬・薬方・方函、その他」の11種に大別したが、この分類は必ずしも適切ではない。例えば上記の金創の部には「神書、治要、秘録、秘話、要術、口訣、口授、瑣言等」とある。つまり「金創神書」、「金創治要」、「金創秘録」、「金創秘話」、「金創要術」、「金創口訣」、「金創口授」の写本が存在するというが、「補訂版国書総目録」<sup>28)</sup>によれば、青洲の著述として上記のほかには「金創秘書」、「金創秘術」、「金創瘍科神書」、「瘍科金創口授」、「金創要術口授」、「金創療治口授」、「金創口授筆記」、「華岡青洲金創療治口授」の題名の写本の存在が知られている。他に「金創新書」、「金創口述」、「瘍科神言」がある。これらは佐藤持敬の言う「異名同書」であるが、もちろん「異名異書」も含まれると思われるので、一冊一冊を慎重に検討しなければならない。例えば、内藤記念くすり博物館所蔵の「金創秘録」(27丁)<sup>29)</sup>は1802年の写本であるが、内容は全く異なる。京都大学附属図書館富士川文庫の「青洲先生金創録」(13丁)<sup>30)</sup>は1820年に篠原 坦(華岡青洲先生春林軒門人録にその名が見えない)が書写した一本である。創口処置に関しては他の諸写本と共通した内容が認められるが、内用薬、外用薬は殆ど共通する処方が見られず、これは佐藤持敬の言う「同名異書」であろう。さらに同じく富士川文庫の「瘍科神書」(11丁)<sup>31)</sup>は書写者、書写年は不明で縫合法(図あり)、缺唇治法、巻木綿図、正骨法だけ記述され、金創の総論、創口の処置、内用薬、外用薬の記述を欠く。しかしこれは極めて不完全ではあるが「同名同書」といってよいかもしれない。

宗田によれば「金創瑣言」の写本も存在するとしているが、管見ではこの題名の写本は各種の目録に披見されない。さらに「瘍科」の部に「神書」と「瑣言」を示している。つまり「瘍科神書」と

「瘍科瑣言」の存在を示しているが、前者は「金創要術」、「外科神書」などと内容が同じなので「異名同書」であるが、「瘍科神書」と「瘍科瑣言」は「異名異書」である。つまり宗田の分類では異名同書であるか、同名異書であるか判然としない。前節に示したように玄調は「春林軒二十一種」の中で「瘍科神書」を初集に、「瘍科鎖言」を第二集に配列して、両者を明確に区別している。宗田の分類は読者に却って混乱を与える。

いずれにせよ著者の調査によれば、「瘍科神書」には少なくとも15種以上の異名同書が存在する。このように青洲の著述は佐藤持敬が指摘するように異名同書が少なくないが<sup>13)</sup>、その中で最も種類が多いのは「瘍科神書」の群である。これは「瘍科神書」が成立してからの年数が長く、需要も多かったので書写された機会が最も多かったことを示唆する。このことは取りも直さず「瘍科神書」が門人にとって華岡流の外科を学ぶ上で最も基本的な事項を解説した入門書で、「春林軒丸散便覧」<sup>32)</sup>など処方集、製剤集を除く著述の中で、最も初期に作られた著述の一つであったことを示す証拠でもある。

## 5. 研究対象とした「瘍科神書」写本の選択とその題名

「瘍科神書」の成立やその内容を検討するに際して、書写年代が明らかな写本を研究の対象とした。書写年代が不明であれば、内容の異同を検討しても有意義な結論を導くことが困難であるので、本稿では書写年代の不明な写本は参考にはしたが、研究対象からは除外した。「瘍科神書」は前述したように、青洲の著述の中で最も頻繁に書写されたにも拘わらず、書写年代が明らかな写本は意外に少ない。管見によれば書写年が明らかな「瘍科神書」の写本の中で最も古い年紀を有するのは、井澤元民による1807年の写本「花岡青洲先生口授」である。

井澤成宣元民は春林軒の門人録に見える「寛政十一 南都南半田押上町 井澤元珉」に違いない<sup>33)</sup>。「井澤元民」と「井澤元珉」は同音であり、同一人物としても差し支えない。1799年に春林

軒に入門しているから、この写本の書写年の1807年まで8年が経過している。門人の多くは1-3年、長くて4-5年春林軒で、そして場合によっては大坂の合水堂で修行したが、書写年の明らかな写本から推察すると、彼らは入門してから半年-1年前後に書写を始めるのが通例であった。井澤の場合、なぜ入門後8年も経ってから書写したのか分からない。一つの理由として、その頃になって漸く書写すべき写本が出現したことが考えられる。あるいは長年の業を終えて帰郷するに際して書写したのかもしれないが、書写の場所が明記されていないので、彼がこの写本を春林軒に滞在中に書写したとは限らず、井澤が帰郷後に書写した可能性も否定できない。全篇丁寧に書写されており、写本中に異筆と思われる部分はない。

上述したように、現在知られる最も古い「瘍科神書」の写本は1800-1810年代の写本であるから、比較のために書写年の明らかな写本で、できる限り1800年から1860年代まで約10年毎の各年代の複写可能な写本を一部ずつ選んで研究対象とした。書写年が近い2本がある場合、誤字が少ない写本を採用した。選択した計6種の写本の簡単な書誌は表2に示した通りである。わずか6種の写本のみを対象にしたのであるから断定的な結論を導きだすのは困難であるが、本稿の目的は「瘍科神書」の写本間の系統を詳細に論ずることではなくして、「瘍科神書」の成立とその内容の概要、経年的変化の大略、そしてこの書の華岡流の外科における位置を知ることであるから、6本の書写年の明らかな写本で所期の目的をある程度達することは可能である。1830年の「金瘡要術」は森 約之が1868年に書写した写本であるが、1830年の写本の形態をそのまま伝えているので採用した。もちろん後述するように「春林軒二十一種」初集の「瘍科神書」は書写年代が1850年以前としか判明していないが、比較のために適宜参照した。

井澤による1807年の写本もまた先行する写本を書写した可能性があることは、その末尾に「井澤成宣元珉謄写」とあることに加えて、その写本冒頭の項目「金創大意」の最初の句「凡金創ヲ縫ト欲セバ、先患者ニ向ヒ心ヲ治ムルヲ第一トス」

表2 研究対象とした「瘍科神書」各写本の書誌

外題：	花岡青洲先生口授	金創要術	金瘡要術*	華岡金瘡要術	外科神書	華岡金創口授
内題：	花岡青洲先生口授	金創要術口授	金創要術	金瘡要術	外科新書	瘍科神言
書写年：	1807	1812	1830	1834	1840	1855
書写者：	井澤成民	不明	不明	敏行小弦	栗山専庵	村上誠軒
丁数：	14	24	42	29	40	35
匡郭：	無辺無界	無辺無界	無辺無界	無辺無界	無辺無界	無辺無界
半丁の行数：	12	11	11	12	10	11
所蔵者：	内藤記念 くすり博物館	内藤記念 くすり博物館	京都大学 富士川文庫	研医会図書館	大塚敬節所蔵	東北大学狩野文庫
整理番号：	490.94ハ	490.94キ	キ210	1789	外科6号	9-22289-1

\*：これは1868年の森約之による書写本で、校正の手が加えられているものの、1830年の書写本の状態をよく伝えており、他に複写を入手可能なこの期の写本がなかったので、1830年の写本として代用した。

(句読点一松木)を読めば了解されるであろう。ここでの「金創」は「傷」を意味する狭義の「金創」ではなくして、「凡(そ)」という冒頭の副詞に続くことを考慮すると、広義の「外傷」を意味する「金創」と解釈されることは、本書の内容が狭義の「金創」ばかりではなく、鉄砲の創、骨折・脱臼の整復法にまで及んでいることから十分納得することが出来る。したがってこれに続く動詞は「縫」では意味をなさない。他の写本を参考にするまでもなく、これは「凡金創ヲ療セント欲セバ、先患者ニ向ヒ心ヲ治ムルヲ第一トス」の誤りであり、書写によって「療」を「縫」とした誤記であることが直ちに了解されるであろう。披見できた30数本の写本ではすべて「療」となっている。つまり「瘍科神書」は1807年以前にすでに成立していたことが示唆される。しかし「金創」を文字通り狭義の「創」と解釈すれば、続く動詞は当然「縫」でなければならず、これで文は成立するが、この場合、なぜこの写本だけが「縫」で、著者が披見できた30数本の写本ではすべて「療」の字が用いられていることを適切に説明できない。この場合、後述するように1807年から1812年の間に青洲の口述に発展があったとすれば、1807年には狭義の「金創」の意で「縫」が用いられ、1812年以降では広義の「金創」の意で「療」が用いられた可能性も否定できない。

題名についてはある程度「瘍科神書」の系統を類推するに役立つ。最古の井澤による写本の題名は「花岡青洲先生口授」であるが、「口授」は青洲が口授したことを如実に反映している。「花

は「華」と同じ読みであるから、ここでは問題はない。しかし「花岡青洲先生口授」の題名では他の口述の主題、例えば内科、産科、乳癌などについての口述と区別がつかない。そこで時日を経るにしたがって、混乱を避けるため、口述の内容が一目で理解できるように題名も変化した。この著者の場合、冒頭に「凡金創ヲ療セント欲セバ」とあるところから、「金創」治療に関する要点を示した著として「金創要術」、「金創秘術」というように「金創」を冠する題名に変化したと推察される。したがって「〇〇口授」という内題を有する写本は題名としては、「金創要術」や「瘍科神書」のように「口授」の二字を含まない写本よりも初期の写本の痕跡や形態を伝えている可能性がある。

「花岡青洲先生口授」という題名から考察すれば、もちろんこれは青洲の命名ではなく、門人の命名であることは明らかである。表2に示したように1812年にはすでに「金創要術」の題名が見られるので、上述した「〇〇口授」から「金創〇〇」への題名の変化は1810年前後にはすでに始まっていたのであろう。

さらに時間が経過して、この著述を青洲の外科、華岡流外科の書とする考えが生まれ、外科総論的内容であったことから、主として外傷を意味する「金創」から外科一般を意味する「瘍科」に変化する機運が生まれ、さらには「外科」の二字が用いられるようになった。とくに1835年の青洲の死後、青洲の著述を絶対視、神格化する傾向が生まれ、それを反映して題名に「神書」、「神言」の二文字が付されて「瘍科神書」、「外科神書」、

「瘍科神言」と題する写本が生まれたと推察される。断定はできないものの、「〇〇神書」の題名は青洲没後の写本に多いように思われる。インターネットの「国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース」<sup>34)</sup>によれば、「瘍科神書」と題する写本は11本あり、そのうち書写年の明らかなのは1836年、1857年、1865年の3本で、いずれも青洲没後の写本であり、「外科神書」で最も古い写本は、本稿で取り上げている大塚本の1840年の書写であることは、上述の著者の推察を傍証するものである。もちろん、青洲没後も表2中に示した1855年の写本「華岡金創口授」（目次では「金創口授」であるが、内題は「瘍科神言」である。）に見られるように、依然として「〇〇口授」の題名の写本も流布した。

## 6. 「春林軒二十一種」初集の内容の検討

上述の諸写本と比較するために、書写年は1850年以前としか分からないものの、「春林軒二十一種」初集として収載された「瘍科神書」について説明する必要がある。前述したように、玄調は青洲の遺教を後世に伝えるために「春林軒二十一種」を編纂し、「瘍科神書」をその「初集」とした。その主旨からすれば、この「春林軒二十一種」に収載された書こそ青洲の正統な著述と考えられるのであるが、玄調がどのような写本を用いて校正したのかなどの詳細は不明であるし、その稿本の所在も分からない。しかし、「春林軒二十一種」の写本の一つである杏雨書屋本の「初集」<sup>21)</sup>によって、その概要を示しておくことは、「瘍科神書」の全貌を理解する上でも必要であると思われるので以下に記したい。

表紙、四ツ目袋綴、縦23cm、横15.3cm。69丁。無辺無界で、半丁の行数は10-12行である。外題（題箋）は「二十一種」、扉には三行に互って「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種初集 自準亭藏」とある。その裏に「書目 瘍科神書 全 附 青洲先生肖像并自贊 活物窮理真蹟 青洲先生医則 青洲先生墓誌銘」が7行記されている。1-2丁は嘉永三年初秋の年紀を有する小林定誠の「春林軒廿一種集序」である。3丁表は生方鼎斎の書

になる「華岡隋賢先生肖像」の題字で、裏は青洲の上半身の肖像である。4丁表は「青洲先生肖像自贊」で「竹屋蕭然烏雀喧 風光自適臥寒邨 唯思起死回生術 何望輕裘肥馬門」の七言絶句である。ここでは第2句で「寒邨」と書かれ、流布している「寒村」<sup>35)</sup>とは異なる点が注目される。

4丁表から5丁裏は青洲の手になる「活物窮理華震」の書、6丁表は青洲先生医則「欲療疾病当精其内外 方無古今唯在致其知」である。6丁表から8丁裏までは仁井田好古の撰になる「青洲華岡先生墓誌銘」である。9丁表から11丁表までは「春林軒二十一種目録」で、これについては第4節で記した。12丁表と裏は「瘍科神書目次」で、以下のような項目になっている。

金創総論、金創備要諸具、金創治術、金創悪候、金創一分八所、止血法、頭創、面創、眼胞創、耳創、鼻創、咽喉創、胸膈創、肺創、背創、臟腑創、納腸術、多血経、突創、筋創、鉄砲創、筋創、湯火傷、放平術、放平膏方、卷木綿寸尺、縫法図説、缺唇治術、金創方品

13丁表から69丁裏までの57丁が本文である。

本稿で対象にした6種の写本と比較すれば、「初集」の本文は1118行であり、1807年の「花岡青洲先生口授」の307行、1812年の「金創要術」の467行、1830年の「金瘡要術」の750行、1834年の「華岡金創要術」の667行、1840年の「外科神書」の552行、そして1855年の「華岡金創口授」の741行に比較すれば、大幅に増加している。もちろん、一行あたりの字数は写本によって異なるが、大まかに見れば「初集」の本文の分量が群を抜いて多いことが了解されるであろう。そして時代が降るにしたがって写本の行数が増加している傾向も窺われる。「初集」において行数が大幅に増加した理由は本文の19カ所において「口授曰」と他の写本からの文を引用して示しているからで、これは玄調による編集と考えられるが、参照にした写本は「〇〇口授」としか分からず、特定することは出来ない。本稿で用いた「花岡青洲先生口授」の該当部分と比較したが、「初集」

に引用された文章とは全く異なる。因みに「初集」において「口授曰」が見られるのは以下に示した項目においてである。( )内に引用条文数を示した。

金創総論(2), 金創備要諸具(1), 金創治術(1), 金創悪候(1), 頭創(1), 眼胞創(1), 鼻創(1), 咽喉創(1), 臟腑創(肺創)(1), 納腸術(1), 多血経(1), 突創(1), 箭創(1), 鉄砲創(1), 筋創(1), 放平術(1), 缺唇治術(1), 金創方品(1)

玄調が「瘍科神書」の項目の過半で「〇〇口授」系統の写本から補充する記述を抄出して付け加えていることが分かる。このことから、逆に1850年頃に「瘍科神書」の他に、「〇〇口授」系統の写本も一つの重要な系統であったことが窺われるが、上述したように、「〇〇口授」と題する写本も多数存在するので、玄調が参考にした写本を今直ちに特定することは困難である。いずれにせよ、青洲の第一の高弟である玄調が編集したことを重視すれば、「春林軒二十一種」の「初集」に収められた「瘍科神書」を以って最も正統な写本とすべきであろう。

## 7. 「瘍科神書」各写本の目次の検討

6種の写本の中で、目次を有するのは、1812年の「金創要術」、1840年の「外科神書」、1855年の「金創口授」の3本のみである。もちろん玄調が編纂した、つまり1850年以前の「瘍科神書」も目次を有する。この3写本は2系統に分類され、1812年の「金創要術」は目次の中に細かく内用薬、外用薬の処方名も記されている。一方、残りの2写本は目次中に内用薬、外用薬の記載は見られず、記述の順序、語句に多少の違いは認められるが、大略同じであると見做してよい。ただし、これら2写本の同じ項目について語句を詳細に検討すると、当然のことながら相当な差違が認められる。

1807年の「花岡青洲先生口授」では、「金創大意」、「金創」、「手足ノ切レ放<sup>ヘナ</sup>レタルヲツグ事」な

ど見出しがあるが、頭から腹部までの創についての記述では、見出しがない。1830年の「金瘡要術」では「金創大意」、「金創」の見出しはないが、頭部以下の創については、「頭之部」、「面部」、「眼」、「鼻」と見出しが付され記述されている。目次は書写者によって後に任意に付加される可能性もある。以上述べたように、目次だけからは「瘍科神書」の成立に関して何ら有益な情報が得られない。

## 8. 「瘍科神書」の緒言の内容の検討

一般的に言えば、最も精神を集中して書写するのは冒頭の部分であろう。写本の後半になるにつれ、集中度は低下するのは一般的傾向である。このような視点からすれば、冒頭の部分は書写時の誤りが最も少ない部分であるともいえる。そこで「瘍科神書」の冒頭の緒言部分を文に分解して、写本間で比較したのが表3である。書写年代は不明であるが、玄調が編集し、最も正統と考えられる「春林軒二十一種」初集の「瘍科神書」の当該部分「金創総論」の各文の主旨を左欄に示し、各写本の当該部分がそれらと同じ内容の文であるか否かを検討した。

全体として1807年の「花岡青洲先生口授」と1812年の「金創要術」以下の写本の間に差があるように思われる。つまり「花岡青洲先生口授」に記載されていない内容が1812年以降の写本に見られるという印象が窺われる。しかしこのことだけで、これらの写本を系統別に分類することは不可能である。これらの写本を含めて著者が実見した30数種の写本によっても、同じ系統の写本が数種存在することは確かであるが<sup>36)</sup>、必ずしも書写年代、書写の新旧を推定することは出来ない。したがって「瘍科神書」の一部の写本については、同一グループと分類することは可能であろうが、グループ同志の関係を類推することは甚だ困難である。一般的には書写が繰り返されると従って、誤字や脱字、文の脱落や付加が増えるとされるが、これは必ずしも当てはまらない。書写に際して手本の誤りが訂正されることはしばしば見られることであり、頭注で訂正されることもあれば、誤字が訂正されて本文で正しく書写される

表3 「瘍科神書」各写本の緒言の内容の比較

「瘍科神書」 (1850 以前)	「花岡青洲先生口授」 (1807)	「金創要術」 (1812)	「金瘡要術」 (1830)	「華岡金創要術」 (1834)	「外科神書」 (1840)	「華岡金創口授」 (1855)
見出し「金創総論」	金創大意	欠	欠	欠	金創治範	金創治範
気を丹田に取めること	×	×	×	○	○	○
世医の飲酒のこと	×	○	○	○	×	○
近世の医流のこと	×	×	○	×	×	○
余は死生を論せず	○	×	×	×	○	○
死生を論ずる者	○	○	○	○	○	○
重症の場合の対処法	○	○	○	○	○	○
重症軽症の見極め	○	○	○	○	○	○
自然の怪我	×	○	○	○	○	○
喧嘩、口論、闘争の怪我の役所、 公儀への連絡	○	○	○	○	○	○
検使到来の遅れ	×	○	×	○	×	○
京都、浪花の例	×	×	×	×	×	○
検使到来前の治療	×	○	×	○	○	○
親族、役人の書付取得	○	○	○	○	○	○
官府への届け	×	×	×	×	×	○
届けの書式	×	×	×	×	×	○
検使前の治療の際の書付け	○	×	×	×	×	○
検使へ治療したことの説明	×	○	×	○	○	○
疵所の検査の必要性	×	×	×	×	×	○
死ぬほどのことではない軽症の場 合、検使へはなるだけ軽症と 報告すること	×	×	×	×	○	○

○：この内容（語句、例えば「気を丹田に取める」の「丹田」など）が含まれている。

×：この内容（語句）が含まれていない。

こともある。また本文において誤字に傍注して訂正されることもあれば、誤字に抹消の縦線を付して脇に正字を記す場合もある。したがって誤字の多寡によって書写年代の新旧を論ずることは出来ない。

また文の付加が認められるからと言って、それが必ずしも門人による恣意的な付加であるとは断定できない。少なくとも青洲在世中の写本では、付加が見られたとしても、それが青洲の口述に準拠した文章であるか、門人による恣意的な文であるかの区別の見分けはつけ難い。というのは、例えば「瘍科神書」の内容について、青洲が行った口述の実態の詳細は知られていないものの、青洲がある主題について口述をする際に、毎年、そして毎回、印で押したような口述を繰り返したとは考えられず、同じ内容についても例を変え、表現を変えて門人に語り、理解させたと考えられるからである。そうすれば、当然のことながら新しい表現が記録されて、それが写本に反映し、写本の

文に異同が生じた可能性も否定できない。これは門人による恣意的な付加ではない。文の削除、脱落の場合も同様で、以前の口述で言及された条文が、新しい口述に際して省略される場合も稀ではなかったと考えられる。偉大な師青洲の文章を門人が勝手に削除するようなことは安易になされなかっただろうが、書写に際して失念した場合があったことを否定はできない。

以上によって緒言部分に関しては、各写本間で大きな違いはなく、外科医としての心構えを説く青洲の考えを大約伝えていると考えられるが、強いて言えば、1807年の「花岡青洲先生口授」とそれ以降の写本の間にかしらの大きな発展があったことが示唆される。

## 9. 「瘍科神書」各写本中の「悪症」の表記

金創を負った重症患者の予後の良し悪しを見極める症状を、青洲は「七悪証」と表現した。詳細に見れば必ずしも7つの症状だけではない。各写

表4 「瘍科神書」各写本中の「悪証」の表記

写本 書写年	「瘍科神書」 1850 以前	「花岡青洲先生口授」 1807	「金創要術」 1812	「金瘡秘術」 1830	「華岡金瘡要術」 1834	「外科神書」 1840	「華岡金創口授」 1855
	直視上竄	直視上吊	直視上竄	直視上竄	直視上竄	直視上竄	直視上竄
	瘡口乾燥	目ノハタラキヌルシ	創口乾燥	創口乾燥	創口乾燥	創口乾燥	瘡口乾燥
	面赤如狂	瘡口カワクモノ	面赤色如狂人	面赤色如狂人	譫語	譫語	面赤如狂
	譫語	顔色赤ク或ハ	譫語	譫語	面赤色如狂	欠伸氣不通	譫語
	搐搦	目狂視スルモノ	手足搐搦	手足搐搦	下利	面赤如狂	搐搦
	反張	譫語	反張	反張	小便不利	面赤目黄血脱	反張
	欠喘	搐搦	欠喘	欠喘	脉浮	搐搦	欠喘
	額上生汗	反張	大便下利	大便下利	大数遅弱沈微	喘氣逆	額上生汗
	小便不通	欠シ或ハ喘スルモノ	小便不利	小便不利	目黄	小便不通	小便不通
	面赤目黄	大便下利	脉浮大数	脉浮大数	額上生汗	額上生汗	面赤目黄
	下利或自利	小便自利	遅弱沈微	遅弱沈微	唇色失常	反張	下利自利
	唇失色	遺尿	目黄	目黄	寒戦身強直	嘔吐噦	唇失色
	寒戦咬牙	脈浮大数遅弱	額上生汗	額上生汗	手足搐搦	寒戦咬牙	寒戦咬牙
	身強直	不寝不食	唇色失常	唇色失常	欠伸	下利或自利	身強直
	嘔吐噦		寒戦	寒戦	反張	唇失色	嘔吐噦
	脈浮大数		身強直	身強直		身強直	脈浮大数
	及沈遅或弱					脈浮大数 及沈遅	及沈遅

本について、この「悪証」の症状を示したのが、表4である。比較のため、玄調の編になる「瘍科神書」の「悪証」を左欄に示した。写本によって順序に不同はあるが、一瞥して1807年の「花岡青洲先生口授」とそれ以降の写本との間には確然とした差が認められるであろう。例えば「花岡青洲先生口授」では「直視上吊」とあるが、他の写本ではすべて「直視上竄」となっている。また前者で「瘡口カワクモノ」となっているが、他の写本ではすべて「創口乾燥」となっている。したがって1807年と1812年の写本間に明確な差があることは間違いない。

#### 10. 「瘍科神書」各写本の「道具」の名称

各写本に披見される手術に用いられる道具について、列記したのが表5である。手術器具については、玄調の「瘍科秘録」の「卷之四上」に示された器具を参考にしても、1804年から1860年にかけて大きな進歩が見られた形跡はない。表5を見れば、1807年の「花岡青洲先生口授」では「毛引」から「縫糸」までの4品が記載されていないが、これは使用されていなかったのではなく、口述されなかったのであろう。しかし1812年以降の写本では順序は異なるものの、言

及された道具は皆同じと見做しても良い。つまり「道具」の項においても、1807年の「花岡青洲先生口授」と1812年以降の写本の間には明確な差が見られるのであって、これは上述した「悪証」による1807年と1812年の写本間に落差があることを補強するものと考えている。

#### 11. 「瘍科神書」各写本の縫合の図について

外傷時の止血や縫合は重要な事項であるが、青洲は縫合についても細かい注意を与えている。細かい点は言葉で表現するよりも図で示した方が理解に便であるのは当然であり、縫合の図が示されている。対象とした6本の中で、図が示されているのは1807年の「花岡青洲先生口授」、1840年の「外科神書」、1855年の「華岡金創口授」の3本で、1812年の「金創要術」、1830年の「金瘡要術」、1834年の「華岡金瘡要術」(14丁裏に大疵の縫合についての1図があるが、他の写本に見られる部位別の図ではない。)の3本では縫合の図が見られない。玄調の編になる「春林軒二十一種」初集の「瘍科神書」では12図である。これらを写本別に、そして部位別に示したのが図1である。原写本で小さく描かれている図を拡大した場合もあり、このため不鮮明の点があることは了解され

表5 「瘍科神書」各写本に記された道具の名称

「瘍科神書」 (1850以前)	「花岡青洲先生口授」 (1807)	「金創要術」 (1812)	「金瘡要術」 (1830)	「華岡金創要術」 (1834)	「外科神書」 (1840)	「華岡金創口授」 (1855)
スホイト 水銃	ヘスポイト	スポイト	スホ糸	水銃	スポイト	スホイト
毛引		毛引	毛引	毛引	毛引	毛引
金創針		金創針	金創針	鍼	金瘡鍼	金創針
小手鉋		小手鉋	小手鉋	鉋	小手鉋	小手鉋
縫糸		縫糸	縫糸	縫糸	縫糸	縫糸
木綿	巻木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿
		皿	皿	皿	皿	皿
鶏卵	鶏卵	鶏卵	鶏子	鶏子(鶏卵)	鶏卵子	鶏卵
焼酎	焼酎	焼酎	焼酎	焼酎	焼酎	焼酎
	酢	酢	酢	酢	酢	酢
椰子油	椰子油	椰子油	椰子油	椰子油	椰子油	椰子油
金創油	金創油	金創油	金創油	金創油	金創油	金創油
ハルサンコツハイ	バルサン	ハルサン	ハルサン	バルサン	バルサムコツハイ	肉切
肉切	ロウザハドロ					
撮鑑						

\*員数：省略。なお記述の順序は、「瘍科神書」(1850以降)に合わせた。

部位 写本	眼	耳	鼻	止血 (1)	止血 (2)	腸 (女結び)	まとい 縫い	大創	カギ型 (1)	カギ型 (2)	十字型	複数の傷
「花岡青洲先生口授」 (1807)	欠					欠	欠	欠			欠	欠
「外科神書」 (1840)												
「華岡金創口授」 (1855)												
「瘍科神書」 (1850以前)												

図1 「瘍科神書」写本4本中に描かれた縫合法の図

たい。一見して1807年の「花岡青洲先生口授」とその他の写本の間には明確な差、つまり時代を降るにしたがって理解を得やすくするために図が大幅に増えたことが分かる。1812年の「金創要術」に図が見られないので、以上のような図の発展が1812年までの間に見られたのか明言できないが、遅くとも1840年以降に12図になったことは確かである。全体としては、時代が降るにしたがって図が増えて理解し易くなった。なお呉はそ

の著の中で縫合の図を示しているが<sup>37)</sup>、これは青洲の口述した写本から採用した図ではなくして、玄調の「瘍科秘録」(巻之四)<sup>19)</sup>から転載したもので、読者は青洲の写本からの模写と誤解する。

「瘍科神書」の他の項目についても検討してみると、大約、上述したように1807年の「花岡青洲先生口授」とそれ以降の写本との間に差が認められる傾向がある。

## 12. 「瘍科神書」の成立年代の推測

青洲は1785年2月に約3年間の京都での遊学を終えて帰郷した。そしてその4ヵ月後の6月に父直道は病没した。したがって、喪の期間は知られないが、青洲が長男として喪に臥したことを考慮すると、帰郷した年から直ちに麻酔薬開発の研究を開始した可能性は低いと見做すべきであろう。青洲は1790年9月に「丸散便覧」の「序」を記している<sup>38)</sup>。父の喪が明けてからこの著述に没頭したと考えられる。さらに翌1791年には「禁方録」(「禁方拾録」は異名同書である)を完成させたが、これには友人中川修亭の「寛政辛亥冬至日」の「凡例」が付されている。諸書を渉猟して処方を集めて纏めたが、処方数は膨大で決して短期間で完成できる作業ではない。さらに1795年5月に青洲は再上洛している。京都での滞在期間は明かではないが、旅舎においてオランダ流の軟膏の製造法を記した「寛文二年阿蘭陀外科伝」を書写している<sup>39)</sup>。そして1796年に完成した中川修亭の「麻薬考」の序文によれば、それまでに青洲は十数人の志願者に対して麻酔薬を投与して全身麻酔の状態を作り出すことに成功していた<sup>40)</sup>。

以上に述べた出来事の期間的なことを考慮すると、青洲が帰郷してから1796年頃までの約10年間は、いわゆる膨大な数の処方の収集、麻酔薬の処方の収集とその応用の研究、オランダ流の軟膏類の製造に関する写本の書写やその研究、そしてそれに基づく製薬の準備に明け暮れていたと推察される。もちろんこの間も門人に対しては、教育のために、いわゆる口述がなされたと思われるが、詳細は不明である。

1796年に「麻薬考」が完成してから1804年10月に全身麻酔下に最初の乳癌手術が行われるまでの約8年間の青洲の動静は杳として知られるところがない。1796年までには志願者ではあるが、10数人に対して一応全身麻酔の状態を作り出すことに成功し、術後に創口に使用する軟膏類の準備も整っていたと思われるので、どうして青洲が臨床に踏み切らなかったか非常に疑問に思われる。恐らく、何か麻酔法ないしは手術法、あるいは

は術前・術後管理法の詳細において未解決の部分があり、それらの解決に全力を尽くしていたのであろうと推察する。このことから青洲が患者の安全に関して非常に慎重であったことが窺われる。

以上を考慮すると、この間、門人たちに対していわゆる口述は行われたのであろうが、1冊の写本として纏められるほどの系統的に行われなかったことが類推される。このことを傍証することとして、前述したように「禁方録」(「禁方拾録」)、「春林軒丸散便覧」などの処方集はすでに寛政期には完成していたが、天明・寛政・享和期、つまり1785-1803年に書写された「瘍科神書」などの写本が現在までに一冊も発見されていないことが指摘されよう。さらに総論の著述は各論より先行するが、青洲の外科各論とも言うべき「瘍科瑣言」の、現在知られている最も古い写本は1810年である<sup>41)</sup>。さらに青洲が最も関心を寄せた乳癌の手術に関しても、まとまった形での最も古い写本は千葉良蔵による「辨乳岩証并治法艸稿」が成立したのが1811年であったことも考慮する必要がある<sup>42)</sup>。したがって1807年の写本「花岡青洲先生口授」は最初に完成した青洲の医術を伝える写本であるとは断定できないものの、極めて早期に成立した写本の一つであることは間違いない。その根拠として、さらに次の諸点が指摘されよう。

- (1) 書名に「口授」の二文字を含むこと。
- (2) 目次が完成していないこと。
- (3) 華岡流を強く主張していること。
- (4) 収載されている処方数が少ないこと。
- (5) 正骨法を簡単に記し、図を付していないこと。
- (6) 口述による痕跡を残しているが、書写による誤りが極めて少ないこと

書写年代が降るにつれて、目次は完成され、処方数は増え、整骨法が詳しくなり、図も付されるようになる。(1)の題名に「口授」の二文字を含む写本が初期の写本の系統であることは前述してきた。(2)の「目次」に関しては、「花岡青洲先

生口授」に見られるように、初期の写本では目次はなく、各項目が列記されているのみであるが、時代が降るにつれて、それが整理されて「見出し」が付され、目次が作られるようになる。したがって目次を欠く写本は古い形態を伝えていると思われる。(3)については少しく説明を要する。「花岡青洲先生口授」の4丁表の第1-2行に次のように記されている。

諸家、金創ノ治術大同小異。吉雄氏ハトエンヘルニ学ビシ者ナリ。予ハカスバルノ術ヲ学ビ、今ハ諸家ノ長ヲ取故、一定セズ。カスバルハ日本ノ外科ノ祖ナリ。(句読点一松木)

この内容の文章は他の写本には見られない。これによって青洲は自分の外科が日本にオランダ流の外科を伝えたカスバル流の流れを汲むもので、それに諸家の長所を取り入れて「華岡流」を称したと主張している。これによって華岡流は吉雄流と肩を並べる流派であることを示唆している。青洲が自分の外科を、一つの流派として主張し始めたのは、1804年に全身麻酔下の乳癌手術に成功してから以降であると見做してよい。それ以前では、華岡流の外科としても、他の流派と何ら変わるところがなかったと思われるからである。そうすれば、「華岡流」と謳って青洲が口授した時期は1804年10月以降のことであろう。このことから「花岡青洲先生口授」系統の写本の成立は1804年10月以前にまで遡るものではないと推察される。なお「吉雄子」とは吉雄流外科の祖吉雄耕牛のことで、彼が師事したオランダ人の医師はヘオル・ルドルフ・パウエル (George Rudolf Bauer) であり<sup>43)</sup>、「トエンヘル」は「パウエル」が訛ってそのように伝えられたものである。

(4)について、「花岡青洲先生口授」では、金創治療に用いる内用薬、外用薬に関して調榮湯、調榮人參湯、金創油の3方を示すに留っているが、以降の写本、たとえば1812年の「金創要術」では、前者は10方、後者は59方を記している。また1840年の「外科神書」では、前者は24方、後者は64方を数える。処方数は経験が積み重ねら

れるに従って増加するのは当然で、この逆の現象が起きる可能性は小さい。例え書写によって若干の削除が見られたとしても、数十方の削除は起こり得ないであろう。(5)については、「花岡青洲先生口授」では骨折・脱臼の整復法を文章で簡単に説明しているが、後年の写本では、より理解できるように図が付されている。ただし後年の写本でも図を欠くものがあるので留意する必要がある。この場合、他の部分でも大幅な削除が認められる。

(6)に関しては少し説明を要する。「花岡青洲先生口授」には明らかに青洲が口述したことを示す痕跡が一カ所披見される。5丁表の第6-7行に止血に関して「是ノ如ク洗エハ、血止テアルモノモ、再出ルモノアリ。熱キキレニテ、押ヘテ居レハ、又止モノナリ。」とある。「熱キキレ」は文字通り「熱き布」であると解釈できる。確かに現在でも、組織からじわじわ出血する際は、温かい生理的食塩水に浸したガーゼで出血部を圧迫して止血をすることもあるが、「熱き布」はこの文脈ではしっくりこない。著者は同音の「厚キキレ(布)」ではないかと推察する。青洲が「厚き布」と口述したのを書写者が「熱き布」と誤って記したと考えている。他に口述を示唆する箇所は見当たらない。書写時の誤りではないかと思われる点について、写本冒頭の「縫」と「療」についてはすでに記した通りであるが、他に一個所ある。14丁表「正骨法」の第1行冒頭の「正骨ハ一言以敝之也」は意味をなさない。「敝」(動詞「おおう」=蔽)は書写時の誤りではないかと思われるが、今直ちに正しい字を指摘できない。このように「花岡青洲先生口授」に書写時に見られる誤字が極めて少ないという事実は、この写本が極めて初期の写本であることを示唆している。

写本の内容から検討すると、前述したように、1807年と1812年以降の写本の間には明確な差が認められるが、この原因については次のように考察する。春林軒再移築に際して春林軒の遺構調査が先年行われたが、それによれば春林軒は1800年代に入って間もなく、拡張工事が行われたと推定される。しかし残念ながら、その正確な年代は特

定されていない。拡張前の建物を第一期春林軒、拡張工事後の建物を第二期の春林軒と呼んでいる<sup>44)</sup>。この拡張工事は門人の増加に対応したものであったと考えられる。全身麻酔下で乳癌の手術を行ったという噂が徐々に広まり、瞠目すべき、そして垂涎の医術を学びたいとして門人が増えた。手狭であった第一期の春林軒で行われて青洲の口述の実態は詳しくは知られていないものの、決して満足すべきものではなかったことだけは確かであろう。少なくとも拡張工事は、患者数の増加に加えて、門人たちへの講義の便についても考慮したものであったことは疑いない。完成した第二期の春林軒では、青洲によって以前より密度の高い、そして系統的な口述が行われたことは間違いない。前述した1807年の「花岡青洲先生口授」の写本と1812年以降の写本との間に見られる明らかな差は、第一期と第二期の春林軒における青洲による口述の質的、量的差を反映したものと著者は推察している。以上のことから、逆に第二期の春林軒は1807年から1812年の間に完成したとも推定されよう。

以上のようなことから、「瘍科神書」は1804年以降で1807年以前に成立したと推察され、青洲の口述を門人が筆録したもので、書名も当初の「花岡青洲先生口授」から後に「金創要術」のように「金創」を冠する書名に変化し、さらに時代が下るにしたがって「瘍科神書」、「外科神書」のように華岡流の外科を神格化するような題名に発展した。それに伴い、全体の文章量も増えた。その内容は、外傷者に対する外科医の心得、役人や家族との対応法、死生を論ずることなく先ず治療すること、身体の急所、重症の兆候、身体各部の外傷の対処法、縫合法、槍、竹による創、鉄砲に銃創、創部に塗布する薬物、服用する薬物、整骨法を記した外科総論である。華岡流の医術を学ぶ上での最も基本的な書とされ、それ故に多くの門人、さらには他門の先生によっても書写されて流布した。そのため異名同書が最も多く、その数は少なくとも15種以上に及ぶ。

## おわりに

「瘍科神書」は華岡流の外科の総論的著述であり、それ故に青洲の著述の中で最も頻繁に書写が繰り返されたため、異名同書は15種以上に及ぶ。1807年に書写された、現時点で最も古いと考えられる写本の中で、青洲は「華岡流の外科」を主張している。このことから、「瘍科神書」の成立は青洲が最初に乳癌の手術を全身麻酔下に行った1804年10月以前に遡るものではないと推察される。

本稿で使用した写本の閲覧や複写の取得に際して、以下の施設の方々に大変お世話になった。記して深謝の意を表する。

京都大学附属図書館、研医会図書館、武田科学振興財団杏雨書屋、東京大学附属図書館、東北大学附属図書館、内藤記念くすり博物館（五十音順）

## 参考文献および注

- 1) 松木明知. 華岡青洲研究文献一覧. 華岡青洲と「乳巖治験録」. 弘前: 松木明知; 2004. p. 183-248.
- 2) 松木明知. 華岡青洲と麻沸散 麻沸散をめぐる謎 (改訂版). 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2008. p. 90-133.
- 3) Matsuki A. *Seishu Hanaoka and His Medicine. —A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery—*. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2011. p. 45-81.
- 4) Matsuki A. *A Short History of Anesthesia in Japan*. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2011. p. 21-72.
- 5) Matsuki A. *The Origin and Evolution of Anesthesia in Japan*. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2017. p. 9-11, 83-91.
- 6) 文献2. p. 218-234. なお青洲の標語は従来「内外合一活物窮理」の八文字とされてきたが、「内外合一」は青洲の墓誌銘を撰した仁井田好古の言葉であり、青洲の言葉ではない。したがって青洲自身の標語は「活物窮理」の四文字である。以下の拙稿を参照されたい。  
松木明知. 「活物窮理」の四文字が華岡青洲の金言である. 日本医史学雑誌 2016; 62: 439-444.
- 7) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2013. p. 46-48.
- 8) 松木明知. 春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画. 日本医史学雑誌 2016; 62: 305-314.

- 9) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂；1923. p.381-430.
- 10) 文献7. p.45-55.
- 11) 浅田宗伯. 皇国名医伝（巻之下）. 出雲屋文次郎；1852. 26丁表.
- 12) 文献7. p.59-61.
- 13) 文献9. p.381-387.
- 14) 文献9. p.386.
- 15) 文献9. p.386-387.
- 16) 文献2. p.218-225.
- 17) 文献9. p.123-154.
- 18) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖華岡青洲. 那賀：医聖華岡青洲先生顕彰会；1964. p.134-143.
- 19) 本間玄調. 瘍科秘録（10巻）. 1837.
- 20) 本間玄調. 続瘍科秘録（5巻）. 1853.
- 21) 春林軒二十一種集 即青洲華岡先生遺教. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵（杏360-3169.
- 22) 瘍科神書（春林軒二十一種初集）武田科学振興財団杏雨書屋所蔵（杏3169-1）
- 23) 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29（華岡青洲一）. 東京：名著出版；1980.
- 24) 宗田 一. 解説（青洲の著述）. 文献23. p.53-55.
- 25) 文献23. p.55-56.
- 26) 文献9. p.449-518.
- 27) 文献9. p.472.
- 28) 補訂版国書総目録（第二巻）. 東京：岩波書店；1989. p.602-603.
- 29) 整理番号490.94.キ.
- 30) 請求番号セ/56.
- 31) 請求番号ヨ/37.
- 32) 「国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース」（2016年10月15日閲覧）によれば、千葉大学には寛政2年書写の「春林軒花岡先生丸散便覧」、華岡丸散便覧があり、国際日本文化研究センターの宗田文庫には同じく寛政2年書写の「丸散便覧」が所蔵されている。また「杏雨書屋蔵書目録」（京都：財団法人武田科学振興財団；1982. p.392.）によれば、「春林軒丸散便覧（一卷）」は寛政9年書写の写本である。
- 33) 文献9. p.450.
- 34) <http://base1.nijl.ac.jp>（2016年10月10日閲覧）.
- 35) 文献9. p.87-88.
- 36) 内藤記念くすり博物館所蔵の「金創要術」（文化9年書写、整理番号39340）と研医会図書館所蔵の「華岡金創要術」（内題は「金創要術口授」、書写年不明、整理番号4854）が同系統の写本であることは、本文の冒頭に前者では「青洲華岡先生口授 加集之細誌」、後者では「華岡先生口授 門人加集之綱 誌」とあり、本文の比較によっても証明される。恐らく前者は後者を書写したものであろう。
- 37) 文献9. p.231, 232, 245, 246, 249.
- 38) 高橋 均, 松村 巧. 華岡青洲自筆「丸散便覧序」考——現代語訳および注解——. 近畿大医誌2000；25:161-164.
- 39) 第6代随軒賢貞次郎の次男陽之助のご子孫中島紀子氏は青洲自筆の写本「寛文二年 阿蘭陀外科伝」を所蔵されており、巻末に「於平安旅舎 寛政七年五月十一日 紀州華岡震 終業」と記されている。
- 40) 松木明知. 中川修亭の「麻薬考」の書誌学的研究——四種の写本の検討——. 日本医史学雑誌1999；45:585-599.
- 41) 補訂版国書総目録（第七巻）. 東京：岩波書店；1990. p.874.
- 42) 松木明知. 千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」と「乳岩辨証」（乳岩辨）——1811年における華岡青洲の「乳岩」治療の実際——. 日本医史学雑誌2016；62:429-437.
- 43) 関場不二彦. 西医学東漸史話（上巻）. 東京：吐鳳堂書店；1933. p.425-428.
- 44) 那賀町役場. 医聖華岡青洲春林軒跡発掘調査資料. 那賀：那賀町役場；1996.

# A Study on the Appearance of Seishu Hanaoka's *Yokashinsho* and Its Manuscripts

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Seishu Hanaoka chose not to publish medical textbooks, in part because of the discrepancy he saw between standardized written advice and the treatment patients actually require. Instead, his writings were handwritten manuscripts, dictated to and transcribed by his disciples. In *Yokashinsho* (*Essential Procedures for Traumatic Injuries*), the most widely circulated of these manuscripts, Hanaoka describes his style of surgery and how it developed. He was influenced, he says, by various schools of surgery, including the one handed down by Caspar Schamberger, a German surgeon assigned to the Dutch trading post at Dejima, Nagasaki. This indicates that the origin of *Yokashinsho* does not date back to before 1804, since that is the year Hanaoka performed a successful breast cancer operation under general anesthesia, and therefore began establishing his method. *Yokashinsho* was repeatedly transcribed for half a century, during which time both the title and the contents changed and evolved. More than 15 different titles with similar contents have been found; *Hanaoka Seishu Sensei Koku*, dated 1807, is the earliest, indicating that the original *Yokashinsho* was likely transcribed between 1804 and 1807.

**Key words:** Seishu Hanaoka, *Yokashinsho*, introduction to general surgery, manuscripts with different titles